

2019 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:15~14:15 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きには使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。
8. 満点が100点となる配点表示になっていますが、国文学専攻(英語外部検定試験利用入試を除く)の満点は150点となります。

一次の文章は、フランスの思想家ジョルジュ・バタイユについて書かれたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

(50点)

バタイユは、西欧の観念主義の伝統を徹底的に批判した人である。プラトン、キリスト教神学、ドイツ観念論哲学といった歴史の前面に出てくる観念主義を論難しただけではなく、さらに観念的なもの⁽¹⁾の捉え方それ自体を問題視していた。ある事柄を観念的に理解するとは、その事柄を一つの型にはめること、一つの物に変えてしまうことである。観念の働きとは、漠とした対象を概念という明確な物に作り変える作業である。これは、抽象的な次元での生産行為であって、具象的な生産行為を導き、支える。西欧、とりわけ十六世紀以降の近代西欧は、この抽象、具象の生産行為の加速度的進展を見たのであり、人は物の生産に⁽²⁾しはられ、生産に寄与しない純粹な消費を正当に評価してこなかった。人間の生の本来的なあり方が消費の側にあるにもかかわらず、である。太陽のように無用に自己を、そして物を消費するとき、生は、自由で自律的な営みになるのである。生産を重視し、消費を軽視した結果、物は余剰になり、戦争という最悪のはげ口において消費された。二つの大戦は、生産を導いた観念の悲劇にほかならない。観念を神とあがめ、生をあなどった賢明なる³西欧人の痛ましい喜劇にほかならない。戦後もこの悲喜劇は、東西両陣営の政治的緊張の故に、いや何よりも両陣営とも抽象、具象の生産行為をいっこうに反省していないために、またしてもくりかえされようとしている。これが、一八九七年に生まれ一九六二年に世を去ったバタイユの西欧批判、観念主義批判である。

私は、バタイユのこういう議論自体を観念的だと感じていた。机上の⁽³⁾ などと言いたいのではない。私は、彼の観念主義批判の内により大きな観念が脈打っていることを、彼の西欧批判が依然西欧の気質に貫かれていることを、おぼろげながら見てとっていた。有用性と無用性、生産と消費、生と死といった根本的で明確なもの⁽¹⁾の見方の設定は日本にない大きな明晰さ⁽²⁾だと思っていた。また生と死の狭間の曖昧な⁽³⁾〈内的体験〉においても意識の目は保たれていて、バタイユは次々に表出する矛盾した感情をはっきり見極めようとしているのである。

この大きな明晰さを身をもつて知つたのは、やはりフランスに渡つてからのことである。もちろんフランス人が常日頃から役に立つの立たないのという物差しをふりまわしているわけでも、生と死の対立を考えて暮らしているわけでもない。可能な限り明晰さを保とうとする（内的体験）にしても、フランス人にしてみれば、異常な、ずいぶんと切羽詰まった体験と映る。バタイユは、フランス人の中で、きわめて個性的で際立ったものの見方をする人ということになるであろう。フランスの古今の思想家たちと較べてもそうである。しかしかれは例外的な存在ではない。フランス人の中には**バタイユを生みだした基盤**がある。

留学中、住まいの近くの郵便局にはよく行つた。封書や小包みを出す窓口は**カワセ**も扱つていつも長蛇の列である。隣の窓口と言えば一人も並んでいない、係の局員は**コクウ**を見上げほんやりしたままである。長蛇の列の方の仕事を手伝う気配などまるでない。そしてその忙しいはずの局員は、多くの客が忍耐強く、人によつてはいらいらした表情を浮かべながら待つているのにもかかわらず、いつかなこれに圧迫されず、涼しげな顔で悠長に仕事を進めている。日本の郵便局では見られない光景だ。日本でなら仕事のない局員は多忙な局員を手伝うだろう。客の気持ちを察し、二人してきばきと仕事をかたづけゆくだろう。日本人の人間関係は納豆のようだと評したエッセイストがいたが、まさにその通りで、人と人の間に心理の交流が、場合によつてはうつつうしいほどに、ある。フランス人の人間関係は、言ってみればツルツルした河原石の関係で、まるでつながりがない。長蛇の窓口の局員とその隣の局員との間にある深淵は、セクシヨナリズムの深淵だが、これは、多忙なはずの局員と客の間に横たわる個人主義の深淵の変奏だろう。私は郵便局に行くたびにこの**個人主義の主題と変奏**にいらだつた。

個人主義には他の局面でも出会つた。フランス人に頼みごとをした場合、通常の親切心もちあわせた人ならば、自分の手の届く範囲で協力してくれる。少しでも範囲を越えたとあっさりだめだと答えてくる。自分の範囲を越えて尽力するフランス人にめぐりあつたらならば神だと思つた方がよい。一九八六年九月パリはテロ騒ぎにみまわれ、以来市当局は外国人の出入国を厳しく規制したことがあつた。私はちょうどその頃フランスを去らねばならず、外国人でこつたがえすパリ市当局の本部にやむなく出頭した。十二月末の早朝六時から並び建物内に入ったのが午後二時、交渉してみるとどの事務員も無理だ、不可能だと言う。

いや最初のうちはとりあおうとさえしなかった。こちらがどう迫っても動こうとしない。私の頼みごとは単純で、その窓口の主張を別の窓口の係員がはなから理解しようとしなから一筆書くなり口頭で説明するなりしてくれないか、というものだった。結局五日後に女神が現われて出国の道は開かれたが、このときの体験は骨身にしみ、今もって忘れられずにいる。役人気質とか官僚主義とは別次元にある一つの習俗を見せつけられていたのだと思う。個人の限界の彼方かなたは別世界で、精神的にかかわる必要はさらさらないとする乾いた習俗に出会っていたのだと思う。

アルベール・カミュの作品に『ジェミラの風』という名エッセイがあつて、作者はその中で、石の街ジェミラを歩き風にあたつてみると、自分の肉体が石のように摩耗して、死にさらされているような気がしてくると綴つづっている。パリの街も石造りで、その人間関係も同じく石造りである。人と人の間に寒風が吹きすさぶ、それだから言葉への依存度が高まり、言葉が重視される。言葉への信仰が生まれる。彼岸への命綱のごとく、言葉は自分を他人につなぐ唯一の手段なのだ。言葉はそれ自体ただの抽象的な記号にすぎないが、そこに人間一人の存在が託される。言葉のない空間、すなわち沈黙の空間とは生と死ほどの差がある。存在がかかっているから言葉はできる限り明確にされねばならない。大切にし、尊ばれねばならない。フランス人は、まるで死を恐れるかのように沈黙を忌避し、明晰な言葉を求め、よくしゃべる。沈黙の闇を押しやるように冗舌に話す。地下鉄の駅のプラットホームで、バスの停留所で、カフェーで、ただ一人きりでしゃべっている老人をよく見かけた。石の街パリの、石造りの人間関係の中で死んでゆく淋さびしさに耐えられぬかのように、しのびよる死の気配に抗あがつて、生きている証あかしを示そうとしているかのように、彼らは、他者に聞こえるほどの声で一人でしゃべり続けていた。

他者は石で闇の中にいる。だが言葉の光が闇をつきつて他者の心に達することがある。精神の交流が深まり愛情の暖かい関係が生じるまでになることがある。愛情の関係は、言葉の関係よりも貴重で得難く、従つてその分いっそう石の冷たさ、死の気配との対比は際立つ。もちろん、セーヌの岸辺で寄りそう若いカップルにこのような愛の際立ちを説いても笑いとばされるだけだろう。しかし孤独に打ちのめされ衰弱している者は、愛に高さを覚え、愛を理想化し、そこに救いを求めるようになる。愛を

求める者たちがいて、愛を差し出す者たちがいた。中世に目を転じよう。

十二世紀初頭からフランスの北部地方においては急速に都市化現象が進んだ。交通のヨウシヨウにあたる大きな町は、手工業、商業、交易の隆盛を見、周辺農村から大量の人口が移入して、都市に成り変わった。村落には土地に根ざした親密で情緒的な共同体があつたが、都市を誕生させた新住民たちは、土地を離れた根無し草の集まり、互いに疎遠な他人の群れであつた。こうして、ばらばらの個人による石の人間関係が生じはじめたわけだが、はじめであつただけに新都市住民たちの不安は、現代の都会人のそれとは比較にならないほど大きかつたであろう。彼らはこれまで経験したことのない孤独にみまわれていたにちがひなく、その不安は、けつして経済面での成功によつていやされはしなかつたはずである。彼らが、人間相互の間に見出しえなかつた精神の安寧を、人間を見おろす高き絶対者に求めたとしても不思議はない。教会勢力は新興ブルジョワジーに神の愛を説いて救済を約束し、その見返りに莫大な寄進を受けた。ゴチック様式の巨大な大聖堂はまさしくこうした事情の下に建てられたのである。十二世紀にパリ、アミアン、ランス等の北部フランスに⁽¹⁰⁾コンリュウ⁽¹⁰⁾されはじめた大聖堂は、当時の新都市住民たちの不安そして愛への飢えがいかに大きかつたかを物語っている。最初から愛があり精神的に充足していたならば、あれほどの大伽藍^{がえん}は建ちしなかつた。愛が不在であつたから、救済を切実に求めていたから、あの天にも届かんばかりの建物は作られたのである。大聖堂は、表に愛の高さを、裏に不安のどん底を象徴的に示している。愛とその不在、生命のぬくもりと生命が見あたらぬ不安、この大きな際立ちを伝えている。

一個人の限界の外には他者という石の群れがある。言葉は沈黙の闇と対照をなし、愛は孤独の不安と対になって成り立っている。個人の限界の内側にはつきりと個人の生活があり、言葉には存在が託され、愛は生命の可能性として信仰されている。個人はその外部と、言葉は沈黙と、愛は孤独と、それぞれ二元論を形成している。そして個人、言葉、愛の側には生があり、それぞれの対立項には死の影が漂っているわけで、これら根本的な二元論は生と死というさらに根本的な二元論を形成しているのである。西欧の文化は、生と死の対立に行きつく根本的な二元論を基底にして成立していると言つてよい。私が大きな明晰性、大きな観念とよんでいるのも、このような生と死の対立を背景にした根本的な二元論の見方のことである。繰り返かえして言うが、フ

ランス人たちは、個人、言葉、愛（そしてこれらの対立項）といった大きな観念を現実離れた抽象的事柄と捉えていたのでは断じてない。彼らは、これらの観念を生きてきたのである。今もこれらの観念は、明確に意識されこそしないが日常の様々な局面で生きられている。バタイユは、西欧の底に横たわるこの種の観念をはっきりと示してくれた思想家である。生と死という最も根底的な見方に立ち至ってまで、そして自分の肉体を賭してまで、示してくれた思想家である。

（酒井健『バタイユ』による）

〔問一〕 傍線(5)(6)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で一画一画明確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「観念的なものの捉え方」とあるが、その説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A ある物を他の物ものと比較して理解すること。
- B ある出来事を一回限りのものとして味わうこと。
- C ある事柄の本質や特徴を分析的に知ること。
- D ある事件のおおよその輪郭を直感で思い描くこと。
- E ある人物の本当の性格を一目で見極めること。

〔問三〕 傍線(2)「人は物の生産にしばらく、生産に寄与しない純粹な消費を正当に評価してこなかった」とあるが、その説明としてみっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 物を生産する労働に価値を置き、労働と生活のバランスを保つ遊びの大切さは忘れられてきたということ。
- B 生活に役立つ物を生産することに価値を置き、趣味にお金を使うことは浪費と考えられてきたということ。
- C 品質のよい物を生産することを重視し、生産物を浪費するだけのお祭りなどは軽蔑されてきたということ。
- D 生産することを自己目的化し、生産意欲を喚起しないような消費は無用の物と見なされてきたということ。
- E 生産し続けることを大事にし、次の生産の余地を生まないような消費は推奨されてこなかったということ。

〔問四〕 空欄(3)には慣用的な表現の一部が入る。もっとも適当な漢字二字の語を答えなさい。

〔問五〕 傍線(4)「バタイユを生みだした基盤」とあるが、それを説明したもっとも適当な箇所を本文中から二十字以上二十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。(句読点等も一字と数える)

〔問六〕 傍線(7)「個人主義の主題と変奏」とあるが、その説明としてみっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 主題は他人の立場で考えようとしないうことで、変奏は仕事を自分のペースを守ってやること。
- B 主題は他人の仕事に口出しをしないことで、変奏はどんな時でも他人の領分を侵さないこと。
- C 主題は個人的な関係のない人に無関心であること、変奏は他人の仕事に無関心であること。
- D 主題は仕事を自分のペースを守ってやることで、変奏は仕事を他人と協力してやらないこと。
- E 主題は他人の気持ちに無関心であることで、変奏は自分に与えられた仕事以外はしないこと。

〔問七〕 傍線(8)「石造りの人間関係」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 村落共同体から切り離された人々は孤独をいやすために教会を重視し、人と神に語りかける言葉に存在を託すようになった。そのような人々の言葉を重視する人間関係のこと。

B 村落共同体が解体したことで人々は自分と神とのつながりを大事にする一方、他人には積極的に関わろうとしなくなった。そのような人々の他人を軽視する人間関係のこと。

C 村落共同体が失われたことで人々は深い孤独感を持つようになり、人をつなげる言葉が重要なものとなった。そのような人々の沈黙が死につながると考える人間関係のこと。

D 村落共同体から離れた人々は経済的な成功を収める一方、他人に不安や恐怖を感じて、個人主義を徹底するようになった。そのような人々のぬくもりのない人間関係のこと。

E 村落共同体に所属していた人々はばらばらな個人となり、不安を感じたため、個人の間をつなぐ愛が大事なものとなった。そのような人々の愛の言葉を重視する人間関係のこと。

〔問八〕 この文章の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A バタイユは、消費こそが人間に自由と喜びを感じさせるものであると考え、生産や有用性を重視してきた近代社会を批判した。生産と消費、有用性と無用性というように大きく対立する二つの概念で世界を捉える考え方自体、観念的に見えるが、その考え方は西欧人の生活に深く根づいたものである。

B バタイユは、物事を概念化して捉え、生産を価値あるものとしてきた西欧の観念主義を批判した。この思想は人間から自由を奪い、自律性を失わせ、消費の喜びを奪うもので人間の可能性を狭めるものと考えたが、バタイユはその批判自体が西洋人特有の観念主義であることも身をもって知っていた。

C バタイユは、観念の働きで事柄を抽象化して捉える西洋の観念主義は、生産を支える思想であり、人間の生を貧しくするものとして批判した。このような観念主義の背景には、中世において村落から都市へ移動した人々の孤独感があり、孤独をいやすために言葉が重視されたことと密接な関係がある。

D バタイユは、生産と消費、有用性と無用性というような対立する概念で近代社会を説明した。このような明晰な説明は二つの概念の対立が際立っている西欧社会だからこそ生まれたものであって、深い孤独感とその反対の人間相互の高い愛もない日本のような社会を同じように説明することは難しい。

E バタイユは、生産と消費、生と死、愛と孤独、言葉と沈黙のような二つの大きく対立する概念で社会を明晰に説明し、前者を均衡を失するまでに重視してきた西欧社会を批判した。バタイユの批判の仕方は、物事を概念化して捉える西欧の考え方にのっとったもので、発想自体としては西欧的である。

二 次の文章は、寿永二（一一八三）年、源氏に攻められた平家が都落ちをする場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

池の大納言頼盛は池殿に火をかけ落ちられけるが、なにか思はれけん、手勢三百余騎引きあうて、赤旗みな切り捨て鳥羽の北の門より都へ引きぞ返されける。越中の前司盛俊これを見て大臣殿に申しけるは、「池殿のとどまらせたまふに、侍どもあまた付きたてまつつてとどまり候ふ。大納言殿まではおそれに候ふ。侍どもに矢一つ射かけ候はばや」と申せば、大臣殿「そのこと、さなくともありなん。年来の重恩を忘れて、このありさまを見果てぬ奴ばら、とかう言ふに及ばず」とぞのたまひける。「さて三位の中將はいかに」と問ひたまへば、「小松殿の君達はいまだ一所も見えさせたまはず」と申す。「さこそあらめ」とて、いよいよ心細げに思はれけり。新中納言のたまひけるは「都を出でていまだ一日だにも経ぬに、はや人の心も変はりはてぬ。まして、行く末こそおしはからるれ」と「ただ都のうちにていかにもなるべかりつるものを」とて、大臣殿の方を見やりて、よにもうらめしげに思はれたり。まことにことわりとおぼえてあはれなり。

池の大納言は、八条の女院の仁和寺の常盤殿にわたらせたまひけるにぞ参り籠らせたまひける。およそ兵衛佐「大納言殿をば故池の尼御前のわたらせたまふとこそ思ひまゐらせ候へ。頼朝においては意趣思ひたてまつらず。八幡大菩薩も御照覧候へ」と度々誓言をもつて申されけり。討手の使のほるにも「あひかまへて池殿の侍どもに弓を引きなんどすな」とのたまひけり。かやうのことどもを頼みてとどまりたまひけるとかや。なまじひに一門には離れぬ、波にも磯にも着かぬ心地ぞせられける。

畠山庄司重能、小山田の別当有重、宇都宮左衛門朝綱、これ三人は去んぬる治承三年より召し籠められてありしを、大臣殿ばかり「これらが首を刎ねらるべし」とのたまひけるを、平大納言と新中納言と申されけるは「これら百人千人を斬らせたまひて候ふとも、御運尽きさせたまはん後は世を取らせたまはんことかたかるべし。国に候ふなる彼らが妻子ども、さこそ嘆き候ふらめ。今や今やと待ち候ふらんとところに、斬られたりと聞こえしかば、いかばかり嘆き候はんずらん。これらをば東国へ返しつかはさるべしとおぼえ候ふ」とひらに申されければ、大臣殿「げにも」とて、これら三人を召し寄せてのたまひけるは「いとま

を賜^{たま}ふ。急ぎ下れ」とのたまへば、三人の者どもかしこまつて申しけるは「いづくまでも行幸の御供つかまつるべき」よしを申す。大臣殿「汝らが色代^{しきだ}はさることなれども、魂はみな東国にこそあらんに、ぬけがらばかり西国へ召し具すべきやうなし。とくとく下るべし¹⁰」と仰せ再三に及びければ、力及ばず涙をおさへて下らんとす。これらも、さすが二十余年の主なれば、別れの涙おさへがたし。

(『平家物語』による)

注 頼盛……平清盛の弟。 大臣殿……前内大臣平宗盛。 三位の中將……平維盛。平重盛の子。

小松殿……平重盛。宗盛の亡くなつた兄。 新中納言……平知盛。宗盛の弟。 兵衛佐……源頼朝。

池の尼御前……頼盛の母。かつて頼朝を助命した。 治承三年……一一七九年。 平大納言……平時忠。宗盛の叔父。

色代……あいさつ。おせじ。

〔問一〕 傍線(1)「侍どもに矢一つ射かけ候はばや」と言うのはなぜか。その理由としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 頼盛の裏切りは自分の身分からは何も言えないが、平家に恩を受けた侍たちがそれに従うことが許せないから。
- B 平家の重鎮である頼盛が挙動不審なので、侍たちを軽く攻撃してみてもその真意をたしかめてみたかったから。
- C 平家の旗印である赤旗を切り捨てたということは、平家に対して攻撃する意志を明確に示したものだから。
- D 頼盛が反旗をひるがえした以上は、平家の一門であることを忘れて先制攻撃することが戦の基本だったから。
- E 大臣殿にかわつて頼盛を討ち取りたいが、身分が違い過ぎるので侍たちに対して腹いせをしようと思つたから。

〔問二〕 傍線(2)「さこそあらめ」の指示内容がわかるように、口語訳しなさい。

〔問三〕 傍線(3)「よにもうらめしげに思はれたり」とあるが、新中納言の不満の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 大臣殿が優柔不断なので、自分が替わって平家一門を指揮すべきであった。
- B この期に及んで平家一門が都に留まろうとするのは、あまりにも手遅れである。
- C 裏切り者を処罰しようとしぬ大臣殿は、平家一門の指揮官として不適格であった。
- D 大臣殿の都を捨てる判断は、将来的に平家一門の滅亡を招く戦略上の失敗である。
- E 都から逃げ出すことは、実は平家一門の意志に反する大臣殿の独断であった。

〔問四〕 傍線(4)(5)(8)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(4) 意趣思ひたてまつらず

- A 恨まれる筋合いはありません
B 意地を張るつもりはありません
C 特に深い考えはありません
D 仕返しするつもりはありません

(5) なまじひに

- A 残念なことに
B 我慢して
C 中途半端に
D なかば強制的に

(8) いとまを賜ふ

- A 追放する
B 休暇をいただく
C 支度をせよ
D 切腹を命ずる

〔問五〕 傍線(6)(7)(10)の文法的な意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 適当 B 可能 C 推量 D 意志 E 命令

〔問六〕 傍線(9)「いづくまでも行幸の御供つかまつるべき」とあるが、三人がそうしようとする理由は何か。本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある) (20点)

正 徳 中、殷 雲 霽 字 近 夫、知 清 江。県 民 朱 鎧 死 於 文 廟 西 廡 中。莫 知 殺 之 者。忽 得 匿 名 書。曰、「殺 鎧 者 某 也」。某 係 素 仇 衆 謂 不 誣。雲 霽 曰、

「此 嫁 賊 以 緩 治 也。門 左 右 与 鎧 狎 者 誰」。对 曰、「胥 姚」。雲 霽 乃 集 群 胥

于 堂 曰、「吾 欲 以 写 書 各 呈 若 字」。有 姚 明 者、字 類 匿 名 書。詰 之 曰、

「爾 何 殺 鎧」。明 大 驚 曰、「鎧 将 販 於 蘇。独 吾 候 之、利 其 賞、故 殺 之」。

(馮夢龍『增廣智囊補』による)

注 正徳……明の年号。 殷雲霽……人名。 知清江……清江の知事を務めていたこと。 朱鎧……人名。

文廟……孔子廟。 西廡……西の回廊。 素仇……朱鎧の前からの敵。 誣……偽って言うこと。

嫁賊……殺人の罪を他人になすりつけること。 緩治……処理を遅らせること。 門左右……役所の関係者。

狎……親しいこと。 胥……下級の役人。 写書……書類を書き写すこと。 姚明……人名。 蘇……地名。

〔問一〕 傍線(1)「莫^レ知^レ殺^レ之者。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A その人が殺されたとは誰も信じなかった。
- B その人を誰が殺すのかが明確でなかった。
- C その人が殺されたのを誰も知らなかった。
- D その人が誰を殺すのかわからなかった。
- E その人を殺したのが誰かわからなかった。

〔問二〕 傍線(2)「若」が指す人物としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 殷雲齋
- B 朱鎧
- C 某
- D 群胥
- E 姚明

〔問三〕 傍線(3)「將販於蘇」は「まさにそこにあきなはんとす」と読む。これに従って、解答欄の原文に返り点を付けなさい。

(返り点以外に何も書かないこと)

〔問四〕 傍線(4)「耳」の読みを、全て平仮名で書きなさい。(平仮名以外に何も書かないこと)

〔問五〕 本文の内容に合致するものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 人々は、殷雲霽に匿名の手紙を送り、孔子廟で発生した殺人事件の解決を遅らせようとした。
- B 人々は、殷雲霽への匿名の手紙で予告された孔子廟での殺人事件の発生を、未然に防止した。
- C 殷雲霽は、匿名の手紙の内容を多角的に検討し、孔子廟での殺人を予告した人物を特定した。
- D 殷雲霽は、匿名の手紙の筆跡に着目し、孔子廟で発生した殺人事件を最終的に解決に導いた。
- E 殷雲霽と姚明は、人々の意見に従い、殺人犯が財宝を持って孔子廟から逃げるのを阻止した。

